

ヴォルフガング・ケッペン 『温室』
—戦後復興期における喪失と問いかけ—

林 敬*

Wolfgang Koeppen's *The Greenhouse*
The spiritual Loss and the Questioning of Germany's Post-War
Reconstruction Period.

Kei Hayashi *

Received October 31, 2005

Abstract

In this contribution *The Greenhouse* by Wolfgang Koeppen is discussed. This novel, the second work of his so-called Three Post-war Works, described critically the society and politics of Germany's post-war period. At the time the novel was published it created a controversy, exhibiting not only a cynical attitude toward Germany's reconstruction, but also exposing FRG's rearmament movement, which Prime Minister Konrad Adenauer had conceived and was carrying out.

About 12,000 copies of the novel were published with the public reacting mostly negatively. Some critics nevertheless valued the novel and appreciated its importance, as it showed the underlying feelings of the German people in the post-war period. In addition, critics valued its narrative method in which much cinematic technique was evident. The narrative is multi-layered and complicated, and generally, one reads it with some difficulty.

Most of Koeppen's literary work is not translated into Japanese but should be due to its importance as literature. In this contribution the novel is explained in detail, its themes discussed and interpreted. In it Koeppen's feelings of loss and the problems of Germany's post-war consciousness are brought to the reader's attention.

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

はじめに

『温室』は1953年に発表された。この年の3月、西ドイツ議会は連合国との間で合意した欧州防衛共同体の下でのドイツ連邦軍創設を正式に批准した。ヴォルフガング・ケッペンは1951年から1954年にかけて「戦後三部作」と呼ばれる作品を発表したが、この作品は第二作である。前作『草むらの中の鳩』が、時代に吹き寄せられた群像を集合的に描くことによって戦後の絶望と希望を表現したとすれば、『温室』は一人の主人公を通して、新たに成立したドイツ連邦共和国における復興をテーマにしている。この作品では前作と比べて政治状況が重視されている。具体的には再軍備問題を中心に、戦争体験を経て新たに建国されるドイツの精神的核心に思いを寄せている。舞台は中央の政界である。ケッペンは「過去の扉を開く作家」と言われたが、本質的には現代に問いかける作家であった。その問いかけは攻撃的さえあったが、彼の過激さは現代ドイツに対する深い苦悩から来ているとされる。そして、問いかけの意味は今も色あせない。

ケッペンは1906年6月23日、旧東ドイツ、バルト海沿岸の都市グライフスバルトに生まれた。従って、2006年は生誕100年になる。彼は第二次大戦前から作品を書いていたが、戦後の三部作により、重要な、あるいは問題的な作家として注目された。しかし、復興に対する批判的傾向と難解さにより、ドイツでも広く読まれることはなかった。日本でも後期の自伝的小品以外ほとんど翻訳されていない。研究論文もそう多くはない。それでも、戦後ドイツ文学に対する関心からは気になる作家の一人ではあるようである。それに、戦後60年、戦争体験や戦後状況が風化したと言われる今日、彼の戦後に対する思いを刻印した諸作品は、生誕100年を機に改めて読まれる意味があるだろう。その意味で、本稿では『温室』の物語りをできるだけ詳しく紹介して、論考を試みる。

1 『温室』の批評

この作品は、発表当時モデル小説との評判を呼び、センセーションを巻き起こした。もっとも世間を騒然とさせたのは、モデル云々よりもそこに描かれたドイツの「復興」批判とその真実性によってであった。モデル小説かどうかについては、当時の批評家たちの見解は否定的である。理由は、人物対照が簡単すぎる、あるいは、せいぜい実在の人物を思い起こさせる程度で、それ以上の人物の対応がないというように、要するに実在の人物の動向が問題とされたわけではなかったからである¹。モデルに擬せられた人物は戦後の指導的政治家たちだったが、いずれにしろこの小説は政界の人物を通して、戦後の政治的葛藤が描かれている。その意味で、これは政治的小説と見られた。この場合、小説のテーマは、戦後の再軍備という個別的なものから、ドイツの復興、ボン世界の暴露、さらに戦後というような広範囲なものが考えられた。

¹ Fritz René Allemann: Treibhaus Bonn im Zerrspiegel. 1954. In: Über Wolfgang Koeppen. Herausgegeben von Ulrich Greiner. 1976 さらにアレマンは、現実の模倣としては大しておもしろくないこの小説の反響は、作品のより深い層から来ているとしている。一方、カール・コルンはこの本がスキャンダルになったのは、政治的暴露によってではなく、その真実性によるとしている。(Karl Korn: Satire und Elegie deutscher Provinzialität. 1953. In: *ibid.*)

しかし、当時の批評は、この作品の政治性を指摘した上で、政治的要素よりも人間的要素に関心を向けている。戦後ドイツの内面的問題性である。先ず、この小説は根底においてはメランコリー小説という指摘がある。この批評は必ずしも好意的ではない。主人公の政治的行き詰まりと諦め、人生に対する根本的な懐疑、このことゆえに、この作品は息が詰まりそうな「温室」の中のさわやかな気流にならないという批判である。さらに、この作品は「雰囲気、風土、住民にさえほとんど意識されていない無気味な危険」などの「精神的現実」を批判的に顕在化した、それは精神的飢餓や映画の中の皮相な「ハイ・ライフ」のようなマイナスイメージの復興の風土として描かれている、しかし、それらはドイツの一面に過ぎない、一国の内的空間が一晩にして消えるというようなことはあり得ない、と批判されている。²一方主人公の人物像に関しては、その批判性に対する高い評価もある。アデナウアーの復興時代に忘れられそうになってしまったことを思い出させたという指摘である。主人公が具現するヒューマンイズムやデモクラシー、自由といった「高貴な要請」が、1945年のどん底で「内面的に哀れだった人間に最初の希望を、最初の政治的意思を、最初の新しい義務」をもたらした、そして、実際「高貴な要請」に身を投じた人がいたが、そういうことを思い出させたというのである。³ただ、見せかけの繁栄、皮相な世相に対する批判と危惧はあるものの、最後の主人公の身投げに象徴されるように、「革命も宗教も死んでしまった世界で、人間の権利の代表者の居場所はない」ということも指摘される。⁴内面への関心が逆の効果を生むことにもなる。マルセル・ライヒラーニッキーは、「ケッペンは過去（ナチス時代）の証言者よりも、現代の証言者になりたかった」と、その同時代的意義を評価するが、しかし、「主人公の心理的レポートにより、政治的構想のラディカル性が減退している」と批評している。⁵この点について、ヴォルフディートリヒ・ラッシュは「ロマンは一般状況の疑わしさの発見だけでなく、革新を期待された世代の不能をテーマにすることによって、固有の重要な真実を展開し、三部作の中では最も重要である」と評価している。⁶

以上のように『温室』は、テーマに関しては、アデナウアーに代表される復興を深刻に批判しながら救済の展望を持たないことから、様々な批評に曝されるが、その語り口に関しては評価が高い。カール・コルンは「この作品が第一級であるのはその語り口による。様々な話の筋、様々な意識水準で人物とできごとを示すこと、集合意識を具体的に考えられ、感じられる物として取り入れたこと、そういったことによって現代の意識一般の反映のような何かが生じている。ケッペンは、言語連想から発展したモンタージュの技法によってそれをリアルに再現した。」およそ、このように述べている。⁷また、マルセル・ライヒラーニッキーはデープリンやジョイスの影響を認めながら、「連想的に紡いで行く内的モノローグ、モンタージュ技法、映画のような場面転換、同時出現技法、点描画法、パースペクティブ転換、叙事的報告、ディアローグ、頭の中の語りのコンビネーション、客観的な描写からモノローグへの気付かない間の移行、

2 Karl Korn: *ibid.*

3 Ernst von Salomon: *Gewitter in der Bundeshauptstadt*. 1953. In: *ibid.*

4 Fritz René Allemann: *Treibhaus Bonn im Zerrspiegel*. 1954. In: *ibid.*

5 Marcel Reich-Ranicki: *Der Zeuge Wolfgang Koeppen*. 1963. In: *ibid.*

6 Wolf Dietrich Rasch: *Wolfgang Koeppen*. 1973. In: *ibid.*

7 Karl Korn: *ibid.*

スローガンや見出しの技法－これらはケッペンが発明したものではないが、彼が初めて卓越した技量でドイツの現実の処理に使用した。」⁸と評価している。しかし、復興批判というテーマに対する不快感ばかりでなく、この表現技法の難解さによって、一般読者を遠ざけたことも否めない。

2 主要登場人物と物語

(1) 登場人物

ケーテンホイフェ：

この物語の主人公。ドイツ連邦議会議員。社民党らしい党に所属しているが、党の方針から遊離した存在である。元新聞記者であったが、ナチス時代にカナダへ亡命した。しかし、難民キャンプを経てヨーロッパに戻り、イギリスに協力してドイツ向け放送に従事した。帰国後まもなく、落命したナチス幹部の孤児を助け、結婚する。さらに、政治活動により連邦議会議員となる。ドイツの復興に対して批判的で、特に物語の主要な政治的テーマである再軍備に対しては、反戦、平和主義的考えから反対の立場をとっている。ボードレルの詩を翻訳し、E. E. カミングスを愛読するなど、モダニズムの詩人的側面もある。

エルケ：

ナチス大管区長の娘。敗戦のさなか両親は自殺し、戦後零落して街を徘徊しているときにケーテンホイフェに拾われた。16歳だった。彼女は39歳のケーテンホイフェと結婚したが、結婚生活は破綻し、レスビアン仲間となり、挙げ句の果てに酒に溺れて衰弱死した。彼女の物語は現実の出来事が始まる前のことなので、彼女は物語が進行中の時間の中では実在していない。

コロディン：

反対党の有力議員。厳格なキリスト教徒。ケーテンホイフェの人道的政治姿勢の理解者である。

フォレストーフォレスティーア：

ドイツ連邦首相の側近。官庁の肩書きはない。精力的な活動家で、ドイツの再軍備を進める。

クヌレヴァーン：

ケーテンホイフェが所属する党の指導者。第一次大戦中銃創を負って帰還、銃弾は心臓付近に残ったままである。その後国会議員になる。しかし、1933年（ナチス政権奪取の年）に収容所に収監された。戦後再び連邦共和国の国会議員になり、ケーテンホイフェも所属する社会主義的平和政党を率いる。統一ドイツ軍には賛成だが、ドイツ分割に通じるドイツ連邦軍創設には反対。

ゲルダとレーナ：

この二人の女の子たちは救世軍の募金をしている。レーナは16歳。東から来た難民、元は見習い機械工だった。

⁸ Marcel Reich-Ranicki: *ibid.*

(2) 物語

物語は主人公ケーテンホイフェの二日間の行動に沿って進行する。それは5つの章から成り立っている。

第1章：夜行列車に乗ってボンに到着するまで

第2章：到着の朝、駅から国会議事堂の自室へ登庁するまで

第3章：所属党のリーダーと会談、および首相側近との会食

第4章：国会委員会出席と、議事堂退出後から深夜の帰宅まで

第5章：ボン到着2日目の朝、本会議、退出後夜ライン川の橋から身を投げるまで

この二日間の行動の間に、主人公の意識の内容や過去の体験、その他の人物あるいは事情が重層的に語られ、そこからいくつかの重要なテーマが浮かび上がってくる。

<第1章>

物語は連邦議会議員ケーテンホイフェが夜行列車に乗って首都を目指すところから始まる。語りの文体は過去形である。しかし、最初の旅の場面から普通の描写ではない。いきなり、主人公が起こす、架空の殺人事件に対する議会の反応が語られる。以下、語られる順に物語を辿っていくこととする。

もし、ケーテンホイフェが殺人事件で逮捕されたら、反対党の議員はもちろん、彼が所属する政党の議員も内心ほっとしただろう。彼は改装されたドイツ鉄道の列車に象徴される戦後復興に批判的立場だからだ。

その架空の殺人事件の前、ケーテンホイフェは家政婦とともに、衰弱死した彼には若すぎる妻を埋葬した。埋葬してから、昔彼の街にいた模範的寡夫と同じ寡夫装束を着て、復讐の殺人をするために夜の街へ向かった。そして、レスビアンたちに君臨する「雄牛」のような女を斧で斬殺した。しかし、この斬殺は、愛する妻を失った男の空想上のことだった。彼は細部にわたってこの殺人を空想した。

ケーテンホイフェは、長い亡命生活から帰還して間もない頃、窓から土砂降りの雨を眺めているとき、ずぶ濡れになって瓦礫の中をさまようエルケを見た。エルケはナチス幹部の娘で16歳、戦争末期に両親を失った。自殺だった。ケーテンホイフェは当時39歳、彼女を保護し、結婚した。やがて、ケーテンホイフェは戦後の政治活動により連邦議会議員になった。彼は変化の中に希望を持って奔走した。若いときの夢を実現したかったのだ。しかし、古い体質は変わらなかった。そして、彼が自由と人権を実現するために悪戦苦闘している間に、エルケはレスビアンの虜になり、情欲と酒に溺れ、絶望の中で衰弱死した。二人が出会ってから6年後のことだった。

夜行列車の中は暑くて寝苦しかった。ケーテンホイフェの眠りも浅かった。その中で、彼は夢うつつのままドイツの復興を巡る政治情勢を考えた。やがて、彼が選挙で苦戦する悪夢。もう5時を過ぎていた。彼は平和と人権を追求する政治家として再選を望んだ。しかし、政治よりも記事を書くべきでなかったか、だが、誰が記事を読者に伝えるだろうか？誰がカッサンドラの言うことに耳を傾けるだろうか？

ところで、この作品では時々イタリック体のコメントが挿入される。「ベルリンのカフェで、人々は精神分析学派のことを論じていた。トゥルペはコミュニストで、ケーテンホイフ

エは市民だった。それは市民と коммуニストがまだ互いに話をしていた時代だった。」その頃の思い出、若いケーテンホイフェを組合活動に誘った男、エーリヒはドイツが無法状態に陥ったとき死んだ。彼の死は信念のためよりも嫌悪感からだった。

ケーテンホイフェは車内のベッドから起きあがり、身体を洗った。鏡の中の、眼鏡を外した自分の顔を見つめながら、思いは約20年前に飛んだ。警部が『フォルクスブラット（民衆新聞）』紙に踏み込んだ日、ユダヤ人編集者たちは各地に飛び、彼もカナダへ旅立った。途中立ち寄ったパリでは、まだ誰もこれから起きることを何も予想していなかった。

ケーテンホイフェはボンで列車を降りた。彼の高揚と墜落の予感がイタリック体で語られる。彼は不幸な若い妻を埋葬して、政治的使命を果たすために首都にやってきた。

〈第2章〉

コロディンは路面電車を降りて、トロリーバスのバス停へ急いだ。朝のボン駅前には役所へ向かう役人たちが混み合っていた。コロディンは混雑を避けて歩き始めた。途中、教会の前でお祈りをした後、（駅から出て来た）ケーテンホイフェに会った。彼らは反対派の党に所属する議員だったので、二人でいるところを人に見られたくなかった。それに、コロディンは下層キリスト聖職者たちの支持があったので、「赤い傾向」があるとみなされていた。二人の間の言葉にならない心理的な葛藤。結局コロディンが言いたかったことは、ケーテンホイフェの宗旨替えだった。問題はドイツ連邦軍の創設だった。しかし、ケーテンホイフェは、戦争によってかき乱されたエルケの短い生涯に思いを馳せながら、新しい墓地は望まないと、言明した。彼は、突撃隊、飛行士、水兵、虚しく「死んだ世代」を、再び生み出したくなかった。コロディンは空を見上げた。暗雲、雷雨の気配。彼らはタクシーに乗って彼らのオフィスへ向かった。

ケーテンホイフェは、連邦議会議事堂の前で車を降りてから首都見学団の一行について回って議事堂を見学した。その後、彼は議事堂前のプレスセンターへ行った。ここは政治上のいろいろな情報が飛び交う。彼は『評判』紙のメルгентハイムを訪ねた。友人というほどではないが、ナチスが政権を取る前のデビュー時代を共にした同僚だった。彼らは嵐の時代に別々の道を歩いた。メルгентハイムはナチスに合わせられるだけは合わせた。しかし、最後は特派員としてローマに逃れた。今では後ろめたい経歴だ。だから、亡命から帰ったケーテンホイフェと戦後初めて会ったときは複雑な気持ちだった。

メルгентハイムはケーテンホイフェにお悔やみを言おうとしたがやめた。ケーテンホイフェの側にそれを避けさせる雰囲気があった。彼は家庭人ではなかった。彼は根こそぎにされて亡命から帰還した。エルケとのことは、ここに根を下ろそうとする、愛を得て、自らも愛そうとする絶望的な試みだった。

妻を失って、失意のケーテンホイフェを奮い立たせたのは、ある政治的な決定だった。しかし、それは危険を伴うものだった。多くの敵を作ることになるからだ。ケーテンホイフェの政治的立場はドイツの保守的復興勢力にとって好ましいものではなかった。メルгентハイムはそのことを解説した。ケーテンホイフェに関して英国陸軍少佐の軍服を着ていたという噂が広がっている。真実であろうと無かろうと、BBC放送のマイクの向こう側に立っている写真は決定的だ。それは政敵には格好の攻撃材料だ。場合によっては放送テープも掘り

起こされるかもしれない。

ケーテンホイフェは確かに将校ではなかったが、反ナチス放送に従事した。カナダで暮らした数ヶ月の収容所。そこから、要請されてイギリスへ戻った。ドイツ向け放送。圧政の崩壊と平和のために闘い始めた。「狂気に終焉を！」がスローガンだった。ドイツのすべての抵抗者と一体感を感じ、今更恥じることはなかった。しかし、メルゲントハイムは、ケーテンホイフェの仲間たちは「抵抗を経歴から消し去った」こと、時代は変わったこと、あらゆる大陸は今や不信のカーテンに閉ざされている、だからケーテンホイフェの主張は何の役にも立たないことを告げた。「復興ナショナリズム」、ドイツの国境は再び閉ざされたのだ。

プレスセンターの出口で彼はジャーナリスト界の長老フィリップ・ダーナに会った。ダーナは東西の大物政治家たちや、歴史を分ける重要な会議の現場を見続けてきた。ケーテンホイフェは彼を亡命前のジャーナリスト時代から知っていた。ダーナはケーテンホイフェを自室へ連れて行き、ある報道機関の紙面を渡した。そこには駐留軍上級評議会（Conseil Supérieur des Forces Armées）の情報としてイギリスとフランスの駐留将軍のインタビュー記事が載っていた。彼らは計画中の欧州軍の指導者で、締結されようとしている軍事条約の中にドイツの永久分割を夢想した。彼らの発言は議会の中に大混乱を呼び起こすものであった。再統一の観点からはまったく容認できないからだ。このニュースはケーテンホイフェにとって強力な起爆剤になりえた。しかし、彼は信念以外にその種の爆薬は必要なかった。窓越しに「温室」のようなボンの街に降る霧雨と青白い稲妻を眺めながら、ダーナの部屋を出た。

<第3章>

ケーテンホイフェは連邦議会の建物の中にある自室へ行った。外は雷雨のために薄暗かった。彼は蛍光灯を点け、その光りの中にエルケの写真を見た。瓦礫の通りで撮った、髪を振り乱したままのスナップだった。最初に出会ったときのままだったので、彼はその写真が好きだった。しかし、それは今、自分を見捨てたことで彼を責めているように見えた。墓の中から叫んでいるように見えた。彼はその写真をはずして書類綴じの中にした。それから彼は便箋を取り出して、ボードレルの詩のタイトルを書いた。彼はボードレルの詩のようにエルケに告白したかった。愛は大きく、悲しみは深かった。孤独への怖れが彼を掴んだ。

クヌレヴァーンが彼を呼びに来させた。彼は第一次大戦前からの筋金入りの党员だった。クヌレヴァーンは若いとき国際主義者だった。国際主義は当時人間の権利を代表していた。しかし、1914年にそれは死んだ。彼の見方によれば、国際主義は第二次大戦後分裂し、国民の支持を失った。彼は国民を失いたくなかった。そのために今度は国民のために軍に賛成だった。社会的で、民主的な愛国部隊に賛成だった。分裂国家には反対だった。彼はケーテンホイフェの報告を聞いた。駐留軍の将軍のインタビューは彼を憤激させた。彼が賛成しているのは統一ドイツ軍であって、永久分割を容認する将軍たちに対しては、社会主義的平和政党のリーダーとして嫌悪した。彼は彼らの発言を大々的に取り上げようと思った。しかし、ケーテンホイフェは、そんなことをしたらそれが本会議に出る前に連邦首相により否定されてインパクトを失うと考えた。彼は拙速で失敗したくなかった。ドイツが将軍たちに支配されることを望んでいなかったからだ。彼は、暴力はいつも不幸をもたらしたと考えていた。

だから、純粋な平和主義、「武器を捨てよ！」に賛成だった。

ケーテンホイフェが自室に戻ると、フロスト・フロスティアが食事に誘ってきた。彼は役職の肩書きはなかったが、政府を仕切る要人だ。彼の目的は懐柔だった。ケーテンホイフェは迎えの車に乗ってフロスト・フロスティアのオフィスへ出向いた。フロスト・フロスティアはすぐにケーテンホイフェをカジノと呼ばれる食堂へ連れて行った。彼は高性能マシンのように食事を詰め込むと、遠回りしながら本題に入った。「中米に行ったことはありますか？」ケーテンホイフェはホンデュラスの偽造パスポートを持っていたことがあると答え、苦しい時代を思い出した。

グアテマラ公使、これが懐柔のための提案だった。誘惑を感じないこともなかった。静かな余生。スペイン風家屋の潇洒なヴェランダ。夜はラム酒、ボードレールの翻訳も完成するだろう。多分それは救済だった。フロスト・フロスティアはケーテンホイフェが引き受けたと思ひ込んだ。簡単に承諾できる話ではなかったが、フロスト・フロスティアは微笑んで言った。「多分、時が解決してくれますよ。」彼自身、かつてハーケンクロイツとも無縁ではなかった。

帰途、ケーテンホイフェはライン河畔のレストランへ立ち寄り、テラスへ出てライン川に向かって席に着いた。洗濯物を干した貨物船が川面を流れて行った。対岸は高級年金生活者の村だ。食事しながら、昔、ここで交わされたかもしれない政治家たちの談話を空想した。ヒトラーや、シュテンダール総領事や、チェンバレンたち。気が付くと、食事が片づけられようとしていた。対岸の優雅な暮らしぶりが見えた。ケーテンホイフェには対岸の人たちが再び自分たちの將軍を望んでいるように思われた。

ケーテンホイフェは待たせていた公用車に乗って、アメリカ上級委員の建物に向かった。アメリカ上級委員の建物は摩天楼のようだった。建物全体に数千本の蛍光灯が点いていて、重なり合った明るい窓から蜂の巣が連想された。屋内も蜂の巣箱のように機械の音がぶんぶんうなっていた。ケーテンホイフェが会おうと思ったアメリカ人は不在だった。彼は最上階のレストランへ行った。ライン川が遠くまで見えたが、パリの地下カフェにいるような気分がした。そこでは紳士淑女がコーヒーを飲み、煙草を吹かしながら果てしなく論争していた。暗い時代だった。ケーテンホイフェは偉大なアメリカが見たかった。それはきっと、こことは違っていた。この建物はアメリカの出先機関にすぎなかった。彼はある講演で「アメリカは存在するのではなく、生成するのだ」と言われるのを聞いたことがあった。彼はこれまで下降ばかり見てきたので生成に賛成だった。しかし、ここで忙しく働いているアメリカ人たちに感じたのは性的放縦だった。彼らは美しいが、虚無の顔をしていた。むき出しの実存だった。

〈第4章〉

この日、ケーテンホイフェは出席しなければならない委員会があった。彼は遅刻した。この時間まで彼は流されるままに流れに乗ってきた。思えば、エルケは流れの中の定点、荒涼とした生命の海の礎だった。それは今、絶望の暗い深淵に沈んだ。彼はエルケを護ることができなかった。そのことが理解できなかった。エルケは人生を意味づける存在だったのではなかっただろうか？仕事や政治は代わりえなかった。残ったのは「存在の巨大な荒涼」、 「無

限の中の無」だった。ケーテンホイフェははっきりとこの存在を感じた。彼は委員会の会話
がもはや理解できなかった。

委員会の審議案件は様々な国内の戦後処理問題だった。住宅、負担調整、東からの追放さ
れた者たちの編入問題、空襲被災者の賠償問題などだ。しかし、ケーテンホイフェには数字
のマジックショーのように思われた。議論よりも、例えば、鉱山労働者の住宅団地がテーマ
になると、彼は抗夫たちのカツカツの生活、不如意な人生を想像するのであった。一体、ケ
ーテンホイフェは何を望んだのか？彼は革命を望んだのか？しかし、今や革命は「ロマン派
の青い標本花」だ。自由、平等、友愛、その時代は過ぎ去った。委員会のメンバーは、議論
に何の反応も示さないケーテンホイフェを見て、戦争犠牲者に食糧や衣服を供給するために
熱心に議論していた当時とあまりにも変わってしまったことに驚いた。

委員会が終わると、ケーテンホイフェは自分のオフィスに戻った。ライン川を越えて虹が
かかっているのが見えた。妥協か決意か？彼はグアテマラとインタビュー情報の間で揺れた。
彼は虹を見ながら大統領の執事のムゾイスを思い出した。彼は昔ある侯爵の使用人で、当時
下々の声を聞きそれを侯爵に伝えた。しかし、今は豊かな境遇に慣れて民衆の声は聞こえな
くなっていった。彼の辿った道は自分の道であってはならなかった。ケーテンホイフェはグア
テマラを断念した。グアテマラは彼にとって「忘却」であり「解消」だった。彼はスペイン
風、死のヴェランダを断念し、連邦軍創設に反対するために演壇を決意した。彼の目的は平
和、人間間の友愛だった。

彼は議事堂を出て、街へ向かった。映画館の前で並んでいる人を見て、彼も映画館へ入っ
た。週間ニュース。ネヴァダのキノコ雲と戦乱の朝鮮半島、ピキニの女、サッカー競技場。
2万人の興奮した群衆。テニスのゲームからはハイ・ライフがこぼれ出ていた。喜劇映画を
見て映画館を出ると日が暮れかかっていた。映画館の前には退屈した若者たちがあてもなく
たむろしていた。ケーテンホイフェは孤独感を感じながら街をぶらぶらした。ショーウイン
ドーの中の「理想の家族」。車、ストーブ、冷蔵庫、しかし、それらは非現実的に思えた。
人々はそれらを得るためにあくせくする。彼はもう一緒にはやれないと感じた。

ケーテンホイフェは、この日2軒のワイン酒場に入った。2軒目にいたとき、救世軍の募
金箱を持った二人の女の子が入ってきた。一人は25歳くらい、もう一人は16歳くらいだった。
彼女たちは若さの魅力を持っていたが、貧しくてはかなげに感じられた。彼女たちが出て行
ってドアが閉まったとき、彼はロンドン時代を思い出した。あのころの惨めな生活。彼にと
っては風と湿気の荒涼とした街だった。救世軍の世話にもなった。彼らの施し方は貧しさを
思い知らせる施し方だった。感謝しなさい、悔い改めなさい。

ケーテンホイフェは店を出てあてもなく歩いていると、思いがけなくさっきの救世軍の女
の子たちに出会った。近づいて挨拶した。年上の方はゲルダ、男を憎んでいる風情だった。
年下の方はレーナ、チューリンゲンから来た難民だった。彼女は元見習い機械工で、西では
ピカピカの工場で働けると思っていた。しかし、若い女の子の難民は性的対象でしかなかった。
16歳のこの難民の子は、恐らくエルケと重なったに違いない。ケーテンホイフェは彼女
を救いたいが、性的にも魅せられるというアンビバレントな感情を持った。

彼女たちと別れてから、ケーテンホイフェは駅の近くのカフェに入った。しかし、彼の夜
はもう妄想の夜だった。妄想はとりとめがなく、時々現実が現れた。この妄想の間に「夜、

夜、死者たちの霊」という文句が何度も出てくる。死者たちの霊が彼の妄想を導いていたようだ。

物語の途中で、突然、コロディンが登場した。稲妻に照らされた屋根裏の小部屋で、連邦議会の有力議員が祈りを捧げていた。バラの木で彫られたキリスト像。それは苦悩の象徴的な形象だった。しかし、それは黙したまま、コロディンに答えることはなかった。自分はどこへ行くのか？彼は目的がなかった。彼はただひたすら祈り続けた。一方、ケーテンホイフェは雷雨の中をタクシーに乗ってまるでゲッターのように感じられた議員宿舎に帰宅した。部屋は彼が前に行き行ったままの状態だった。議員生活を示すいろいろなものが散乱していた。これは現実の生活とは言えなかった。エルケの最後の手紙があった。彼女は違った生活のためのチャンスだった。ケーテンホイフェには彼女と共にすべてが終わったように思われた。眠られぬ夜、ロリコン、墓地をさすらう人、死者たちの霊が彼についていく。

〈第5章〉

二日目の朝。ゲッターの朝は早い。バスの水の音、トイレの音。どこかのスピーカーからは体操のかけ声が聞こえた。ケーテンホイフェはまた少しグアテマラのことを考えた。誘惑は終わった。ケーテンホイフェは死への行進を阻止することを天職と思った。

本会議で彼は政府に反対する演説をする予定だった。しかし、議場に入る前から結果は予測できた。弁護士のモーリスがケーテンホイフェに過激にならないように忠告した。党は無条件に軍備に反対しているのではない。目下議論されている新軍備に反対なだけだ。フロスト・フロスティアも念押し of 電話をかけてきた。「グアテマラは認可されるだろう。」モーリスがまた情報をもたらした。将軍たちのインタビューは朝刊に大々的に報じられているというのだ。連邦首相はもうディフェンスを固めたはずだ。ケーテンホイフェの演説の起爆力は減退した。

本会議の開会を告げるベルが鳴った。本会議はサッカーのような遊びではなかった。それは人の生死に関わるのだ。もちろん軍需による金儲けにも関わる。それゆえ、サッカーと違ってゴールの結果は始まる前からわかっていた。連邦首相が演説した。ケーテンホイフェは、連邦首相は自分の政策で世界に緊張をもたらし、その緊張の火を消すために消防隊（軍）を創設したと考えた。しかし、彼はそのことが緊張を激化させ、最後には消防隊同士衝突するかもしれないことを看過している。ケーテンホイフェは世界を燃えさせてはならないと願った。

ケーテンホイフェの演説の番が来た。彼は軍備ではなく平和を訴えたかったが、彼の考えにもジレンマがあった。確かに武器を持たず殺される方が戦場で戦死するよりは道徳的で、その覚悟は世界を変える唯一の可能性だ。しかし、誰がこの危険な覚悟をするだろう？ジレンマを吹っ切るように彼は大きな声で連邦首相に向かって言った。連邦首相は軍を創り、軍事同盟に道を開こうとしているが、連邦首相の栄誉の枢には数百万の死体が続くだろう。ケーテンホイフェは恐らく感情的になりすぎて、これらのことを本当に言ったのか、考えただけなのか、もはや区別がつかなかった。その後何人かの演説があり、会議は休憩になった。

休憩を挟んでクヌレヴァーンの演説があった。彼の考えは、先ず東西ドイツを統合し、その後連邦軍を創設し、軍事同盟することであった。そして投票。投票の結果勝利した連邦首相は、何故か孤独だった。

ケーテンホイフェは自室に戻った。彼は敗北した。しかし、勝者は政敵ではなく、状況だと思った。彼は力を使い果たしたことを感じた。彼はエルケの写真を引き寄せ、やりかけのボードレールの翻訳を引き寄せた。それから、E. E. カミングスの詩の入った鞆をオフィスに残して街に出た。「(キスして) 君は行くんだね」という詩だった。

ケーテンホイフェの物語には、ボードレールやカミングスのような近代詩人だけでなく、ギリシャ神話や伝説が挿入される。前者がケーテンホイフェの心情を暗示しているとすれば、後者はあたかも神話的に物語を予言、あるいは意味づけしている趣がある。自室をあとにしたケーテンホイフェはさしずめ王女を護れなかった年老いたドラゴンだった。彼は放浪者のようにライン河畔の通りを歩いた。鯨のマーガリンのポスターがあった。鯨の標本もあった。鯨から予言者ヨナが想起された。彼は仲間によって海に投げ込まれたが、鯨の体内で生き延びた。生き延びた彼はニネヴェへ行って、街を沈下から救った。しかし、ニネヴェの王のように、ケーテンホイフェの予言を聞く者はいなかった。彼はまた昨夜のワイン酒場へ入った。様々な悔いや妄想が浮かんで消えた。彼は昨夜の少女たちを待っていた。エルケに重なる見習い機械工のレーナ。彼女を救いたかった。エルケのようにいとおしかった。

彼女たちはやって来た。彼はレーナを連れて店を出た。ゲルダもついてきた。外には黒塗りの車が止まっていた。近くの瓦礫の上にフロスト・フロスティアが坐っていた。彼は石化した幻影のように不動だった。彼のみならず、すべては非現実的、超現実的だった。彼らは崩れ残った建物の中へ入った。ケーテンホイフェはレーナの服を脱がせ、ゲルダに「天国の花婿」の歌を演奏するように命じた。ギターの音と歌に合わせて、諸々の幻影たちが地下から這い出てきた。生きている者たちの幻影も集まってきた。しかし、すべては死の色の濃い幻影だった。ギターの音は瓦礫の上にこだまし、その反響の中でケーテンホイフェは見知らぬ自分を見出した。そこには愛もなく悲しみだけが残った。彼の中で墓が大きく口を開けているようだった。彼は女の子たちと別れ、空襲の際の避難方向を示す指示標識「ライン」に沿って、ライン川に架かる橋にたどり着いた。彼は自分自身が重荷になっているのを感じた。そして、物語は「この橋からの跳躍が彼を自由にした。」で終わる。

3 作品の解釈

〈批評〉のところで触れたように、この作品のテーマは、政治的な要素と人間的な要素が混じり合っている。焦点となるところは、政治的な面では(1)再軍備と平和主義、(2)官僚主義、経済的復興、国民とアメリカ化、人間的な面では(3)主人公ケーテンホイフェとエルケの関係、そして(4)ケーテンホイフェの自殺といったところである。これらは戦後の問題だが、亡命体験や東からの難民の想起も重要な背景になっている。これらの問題を物語の語り手は主人公ケーテンホイフェの眼を通してとりあげている。従って、特に政治的な領域では、反対意見が十分に反映されていない恨みはある。また、物語は、時間の経過としては主人公の愛する者の死から始まって、主人公の死で終わるので、全体の基調音が憂愁に満たされ、政治小説としてみた場合は悲観的に流れすぎる嫌いもある。このようなことから、この小説では政治的側面よりも精神的側面がより重要な意味をもつと思われる。

(1) 再軍備と平和主義

再軍備の問題は、当時、現実の政治状況としてはドイツの将来に関わる大問題であった。しかし、それに関する議論自体が、この作品の本質的な問題ではない。それは政治問題であり、それであるならば駆け引きも妥協もあり得るであろう。主人公にとっては、確かに彼は議会で反対演説をするのだが、政治的な問題としてよりも、精神の、信念の問題であった。反対の理由は二つある。一つは政治的なものだが、ドイツでは民主主義の伝統国と違って、軍人は政治に対する軍事の優位を打ち立てるだろうという危惧と懼れだ。それはドイツの歴史が示している。もう一つは完全に精神的な信念である。「武器を捨てよ！」これは第一次世界大戦末期の反戦スローガンであったが、ケーテンホイフェも純粋な平和主義に賛成だった。なぜなら、それ以後の歴史を振り返れば、「暴力はいつも不幸をもたらした。敗北はそうではない。」と思われたのである。彼の見解によれば、非暴力は少なくとも、モラルの勝利をもたらす。武器や暴力の放棄は、それを使用したときに生じるような悪へ決して導くことはない。従って、本会議で連邦首相の演説を聞きながら、戦争に対する備えより、戦争の妄想を克服することを考えた。彼は「殺される方が戦場で戦死するより道徳的にまし」と考えた。そして、「戦場で死なないという覚悟」に、世界を変える唯一の可能性を見たのである。第一次大戦後、トーマス・マンは自分の民主主義への転向について、思想 (Gedanken) は変えても心情 (Gesinnung) を変えたわけではない、と弁明したことがある。おそらく主人公を通して作者にとっても、平和主義は心情の問題であったのであろう。しかし、現実の政治の次元では、一度開かれた国境は再び閉ざされ、復興ナショナリズムの下で、それを守るために軍備と軍事同盟支持が大勢であった。

(2) 官僚主義、経済的復興、国民とアメリカ化

主人公が訪れた中央官庁のオフィス、「ハイ・ライフ」の商品を陳列しているショーウィンドー、ライン川の遊覧船や酒場の客たちは、それぞれ戦後の官僚主義や経済的復興とそこに生きる人間を象徴している。豊かな生活、それを得るためにあくせく働き、殺人や詐欺もやりかねない。主人公には、彼らがかつて「ハイル・ヒトラー」と叫んだときとどう違うのだろうか、と思われた。このようなカリカチュアを通して明らかなように、主人公も語り手も復興に対しては嫌悪感すら抱いていることが、語り口から窺われる。戦後からアデナウアー時代にかけての復興の過程で何が失われた、というよりも結論を急ぐことになるが、主人公が生き得ないことそのものが復興に対する語り手の不信を示しているのである。オフィスやショーウィンドーに見られる復興の外面的華々しさおよび内面の空虚は誇張されすぎているようにも見えるが、この点については、多分アメリカ化と無縁ではないだろう。このアメリカ化をもたらしたアメリカは、ケーテンホイフェが思い描いていたアメリカではなかった。彼は以前「アメリカは人類がその使命を実現するための最後の実験であり、同時に最大のチャンスだ」と言われたのを覚えていた。スケールが大きくて自由なアメリカ、それがおそらく彼のアメリカだった。しかし、在ドイツ公館のオフィスは無機質であり、そこで働く現実のアメリカ人たちは、立ったままコーヒーを飲み、可愛らしくおしゃれにナイロン製ストッキングをはいたアメリカ人たちは、パワーに満ちているものの、内実のない、むき出しの実存を思わせた。前作『草むらの中』では、アメリカとヨーロッパの融合は違った形で描かれていた。そこには互いに響き

あうものがあり、両者にとってヒューマンな充足の希望があった。それとの比較で見れば、『温室』のアメリカ化は一方的であり、ヨーロッパの何かあるもの、多分精神性が失われるアメリカ化だった。

(3) 主人公ケーテンホイフェとエルケの関係

終戦直後に書かれた有名な短編、ヴォルフガング・ボルヒェルトの『夜になればネズミは眠る』の中で、戦争から帰った男は、瓦礫の中にうずくまる少年を生の世界に導いた。ケーテンホイフェとエルケの関係もそれと似ていた。しかし、ケーテンホイフェはなぜエルケを救えなかったのか？エルケは戦争ですべてを失った孤児だった。一方、ケーテンホイフェは亡命からの孤独な帰還者だった。ドイツの悪を終わらせるために闘いつつ生きてきたのだったが、多くの亡命者の戦後のように、歓迎されるどころか、誤解され、内心でうさんくさく見られた。彼も生の根拠を失っていたのである。それゆえ、エルケは庇護の対象であると同時に彼の「生の定点」、生きる希望でもあった。しかし、彼はエルケの内面を本当の意味で理解できなかった。彼女は戦後と彼によって与えられた自由をどうしていいかわからなかった。過剰な自由は彼女にとって虚無の大海だった。映画館の前にたむろする若者たちも同様であるのだろう。もう戦場へ駆り立てられることはなくなったが、無限の荒野を満たすものはただの欲望にすぎなかった。結局のところ、彼らにとって終戦は戦争から帰った男が感じたような、ケーテンホイフェが感じたような希望ではなかったのである。それゆえ、ケーテンホイフェはエルケがなぜ死んだのか理解できなかった。エルケも、彼をまったく理解できなかった。亡命も、戦後の思いも。エルケは彼の仕事に反感を感じるようになり、いらいらと欲望のままに道を間違った。ケーテンホイフェにとって、エルケの死は自己に向けられた批判であった。

(4) ケーテンホイフェの自殺

ケーテンホイフェはボードレールに憧れ、カミングスに共感する「ロマンチスト」である。ロマンチストにはやや揶揄の意味も込められている。彼は亡命から帰還し、戦争犠牲者救済を手伝った。そうしながら、若いときに得られなかった人権と自由をドイツにもたらしたかった。あるいは、彼の願いは平和であり、人間と人間の友愛であった。しかし、廃墟は新たな開始の希望ではあったが、決してそれらにつながらなかった。再軍備は政治問題であるが、そのことの象徴である。彼はかつてジャーナリストを志した頃と同僚から、ケーテンホイフェの仲間たちは「抵抗を経歴から消し去った」こと、時代がとっくに変わったことを指摘された。それゆえ、彼はまったく違った世界、革命を望んだのだろうか？確かに彼は本来的にはそれを望んだかもしれない。しかし、現実的にはそれを望むことはできなかった。「革命は死んでしまった」からである。「自由、平等、友愛に対する繊細な信仰」、それはもはや「ロマン派の青い標本花」にすぎなかった。しかし、革命が死んで残ったものは何か？いつも陽のあたる場所を歩いてきたライン河畔の高級年金生活者といい、ワイン酒場の常連席にいる商店主たちといい、結局人間は戦前も戦後も根本において変っていない。確かに彼は「絶望の中の幸せ」を望んだが、そういったものはどこにも存在しなかった。宗教と哲学が虚と化すとき、おそらく、近代のおびただしい犠牲者たちの霊は、ただ夜中に地底から這い出てきて、虚しく徘徊するばかりだ。ケーテンホイフェはこの状況に耐えられなかった。仲間を見出せず、再軍備を阻止し得ず、戦争

犠牲者のエルケを救うこともできず、頭の中の様々な想念に押しつぶされて、彼自身夢遊病者のように夜の街を徘徊することしかできなかった。そして、街で出会った難民の少女、機械工として働きたいのに、娼婦としてしか相手にされないレーナ、瓦礫の中で出会った頃のエルケと重なり、何とか手をさしのべたかったレーナ、彼女とのエピソードはケーテンホイフェの哀切と墮落以外の何を意味するだろうか？それゆえ、彼は自分が重荷になるしかなく、この物語は敗北から敗北への物語に終わった。なお、ケーテンホイフェの死については「挫折の告白としての死」⁹という見方もあるが、自殺自体は余り重要な意味を持たないだろう。むしろ、彼と共に何が失われたのかということの方が、より重要な問いかけであるように思われる。

4 表現技法

最後に、〈批評〉のところでも触れたが、表現技法について簡単に付言しておきたい。¹⁰前作『草むらの中の鳩』でもそうであったが、この作品でも映画の手法がふんだんに取り入れられている。いくつかのシーンを組み合わせたモンタージュ風描写、それにフラッシュバックの手法を使った現在と過去の時間を行き来する場面構成があり、主人公の過去の体験や内面を映画のように視覚イメージ化して表現している。例えば亡命体験とそのときの内面の苦しさはどのように描かれている。そのようにして、現在の思いの原点や背景が挿入される。情景描写にはアングル、俯瞰、アップなども工夫されている。主人公ケーテンホイフェがエルケを初めて見かけた場面やラインの川面を航行する船や河畔の描写などにそれが見られる。さらに、商品コマーシャルや詩人の詩、神話を材料にしたコラージュ風構成があって、現実のカリカチュアを提示したり、主人公の意識、運命の予感を暗示したりしている。

これらの手法を語り手が駆使して物語を語っているが、語り手の視点は必ずしも主人公の視点というわけではない。語り手は自由な位置にいて、自らの視点で叙述したり、自在に主人公の意識の内外に入り出して叙述したりしている。そのように主人公の考えや妄想、幻想にくだんだ描写も多く、ついには語り手と主人公の視点が融合し、例えばロンドンで嵐がまるで魔女のように荒れ狂う場面は、迫真の心象風景になっている。¹¹また、語り手が語る地の文までも主人公の頭の中と連動して幻想と化し、最後に主人公が橋から飛び込む場面は、本当のところは現実なのか、幻想なのか、厳密には断定できないほどである。

叙述の視点について、もう一点言及しなければならないだろう。イタリック体の記述である。これは随所に挿入されるが、あたかも語り手の分身が、第二のコメントーターとしてその場に居合わせて、自由な立場から、事情を説明している。従って、叙述が現在形の場合もあるが、それは、主人公に対して皮肉な見方から、同情を寄せる見方から、あるいは全く無関心な見方から、語り手の語りの補足であったり、関連する事実を気づかせるものであったりする。例えば、最後のコメントは、主人公が絶望してライン川へ向かう場面で、「終わった」という語り

⁹ Das Treibhaus. In: Kindlers Literaturlexikon.

¹⁰ 拙著「絶望と希望と――一つの時代の証言：ヴォルフガング・ケッペン『草むらの中の鳩』の風景」(北陸大学紀要第24号, 2000)の末尾でも、表現技法について簡単に言及した。

¹¹ Wolfgang Koeppen: Gesammelte Werke 2. S.341-343.

手の叙述の後に「それは終わった。永遠はもうすでに始まった。」と、ギリシャ悲劇のコロスのように繰り返している。

修辞法の面から見ると、基本的に過去形で書かれている。接続詞、カンマ、関係代名詞などの多用によって、センテンスは往々にして長い。時にピリオドまでページの半分を超えるものがある。

おわりに

この主人公の敗北の物語から、この挫折の物語から、何が汲み取られるだろうか？それはおそらく読む人の時代によって異なるだろう。語りの技法も含めて、関心の焦点も異なるだろう。しかし、この作品が戦後ドイツに対する批判という点では変わらないようである。その場合、確かにこの作品だけでは展望がなく、哀愁の基底音が強く感じられかもしれないが、前作と一連のものとして読むならば、精神の一定の方向付けがより鮮明に読み取れるだろう。いずれにせよ、革命やナチス期の国民的高揚がもたらしたカタストロフィーの後で、ケッペンは、経済復興と再軍備に象徴される「温室」のようなドイツの戦後空間に胚胎する精神的喪失を、悲劇的に喚起した。主人公ケーテンホイフェの挫折と没落の物語は、戦後の精神的基底に対する重い問いかけであったと言える。

使用テキスト

“Das Treibhaus”. In: Wolfgang Koeppen Gesammelte Werke 2. Frankfurt am Mein 1986.